

東儀俊美、

何時の頃からか不吉の舞と囁かれ、表舞台から姿を消した採桑老。本来、百歳まで生きる長寿を寿ぐハレの舞である採桑老を復元した東儀俊美氏に、この舞の特色、歴史、復舞の経緯、雅楽の将来についてなど、お話いただきました。

取材・文／大和田瑞穂

採桑老を語る

○不老長寿を舞う、採桑老

採桑老については諸説がありまして、一番古いものでは中国の唐の時代に作られたという記録があります。これには「老人が杖を頼りにゆっくりと歩く様子を写した」程度しか書かれていません。この杖というのが、功績のあつた臣下が天皇から授かる鳩杖で、鳩杖を持つている老人というのは割と位の高い人のようです。白の装束も舞楽装束に比べると位が高く、衣冠装束と同じつくりになっていると思います。

もう一つ、不老長寿の薬を探し回る姿だという説があります。それで僕が採桑老を復元した時には、不老長寿の薬を探し歩いて疲れ途中でちよつと休んだり、というような舞振を入れたんです。ほとんどの舞楽には、ストーリーというものがありません。「還城楽^{ひんじょうがく}」や「陵王^{りやうおう}」などは少しストーリーじみたものはありますが、採桑老ほどはつきりしたストーリーがあるのは珍しいと思います。また、「係物^{かかりもの}」といって、介添が舞人を舞台まで連れてくるのも他にはない採桑老の特色と言えますね。

それから、元々は舞の中で唱える





【面】
能の翁面の前身ともいわれる老人の面で、その額のしわは死相を現しているとも言われます。採桑老の面は、現在、宮内庁楽部、四天王寺などに数面残されていると言われています。

「詠」がありました。「三十歳で酒盛んなり。四十で氣力衰え、五十に至つて老衰的になり。六十で歩行が怪しくなり、七十では杖が。八十座して、九十にして病を得、百歳にあまりて……」と。百歳まで生きているから長寿の舞なんです。そのせいでしようか、平安の昔は子や孫にこの舞をよく習わせています。詠は、面をかぶつた舞では聞こえにくいこともあつて、現代ではほとんどはしよつていません。

◎ひとときわ異彩を放つ舞

康和二年(二〇〇年)に採桑老の伝承者であつた多資忠おほのすけただが、同曲を舞わせてもらえなかつた山村政連まさとつらにより殺害されるという刃傷沙汰がありました。それによつて採桑老は一度、多家で断絶したんです。

雅楽の曲の中では唯一とも言える刃傷沙汰の言い伝えがあるうえ、「この舞を舞うと二、三年で死ぬ」というジンクスまで囁かれて、何時の頃からかあまり舞われなくなりました。事実、明治以降で舞つた中に二、三年で亡くなつた方が三人ぐらい続いているんです。そもそも、あまり若い人の舞う舞ではないしね。

宮内庁楽部で舞つた記録というのもありません。宮内庁楽部には装束も面もあつて、『明治選定譜』の中に譜面もあるけれど、やつたことはない。なぜかと考えたところ、天覧舞楽など華やかな場

に採桑老はあまりふさわしくないからではないかと。きらびやかさが無いし、面は怖い感じですしね。たとえば、ご大札の時は「萬歳楽」と「太平楽」、天皇誕生日の歓迎は「伊勢海」と「鶏徳」など、慣例的に曲目が決まつていて、あとはそのときそのときですけれど、採桑老をやるというような舞楽会はないんでしょう、きつと。番舞ばんまいといつて相手をする舞がないですからね。

左方舞楽が二十数曲ある中で、採桑老がそれだけ独特の舞であるということです。

◎東儀家に残る歴史

採桑老が東儀家へ伝えられてから、貞享二年(二六八五年)から元禄二年(二六八九年)の間に、秦兼溢はなねあふが二回舞つたという記録が「四天王寺舞楽之記」にあります。それ以降は、秦廣厚はろあつという人が、元禄十四年、六十九歳の時と元禄十六年、七十一歳の時に舞っています。秦廣厚、廣ひろという字が名前にあるので、東儀でなくて蘭だと思ひますが、四天王寺派という意味では舞っていますね。あと、享保三年、享保五年あたりに、秦兼佐かねすけという人も舞っている。これは、兼が付いているから東儀だと思ひます。秦あというのは秦河勝の一族で、四天王寺は全員、元は「秦」姓です。秦姓の蘭、林、東儀など、全部まとめて秦姓になっています。東儀などそれぞれの姓に分かれたのは江戸時代とされていますが…。



採桑老

東儀俊美

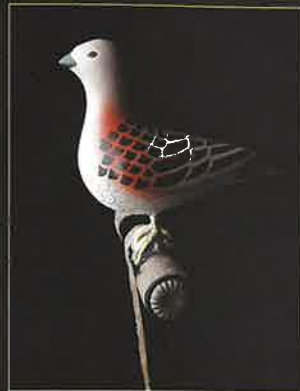


【鳩杖】

鳩が止まった様子を表した杖。功績のあった位の高い臣下が、天皇から授かる杖とされています。

【装束】

採桑老では、頭には牟子を被り笹を挿します。腰には薬袋と下鞘をふら下げ、鳩杖を持ち、白装束を着します。東儀俊美氏によれば、四天王寺楽派に伝わる装束は江戸時代初期ぐらいのものではないかとのことです。



【鳩杖】



【袍】



【薬袋(やくたい)】



【牟子(むし)】



【沓】



【下鞘(さげざや)】

東儀という姓になつてからは、舞ったという記録がありません。秦俊寿としなぐという僕の五代前の人が写した舞譜が残っていて、これが一番新しい譜面なんです。この人が譜面を写したというのは記録にありますが、舞ったという記録がないので、写すだけ写して舞わなかつたんじゃないかと思っています。僕は今回、この数百年前の譜面をもとにして採桑とくそうを復元したんですけど。全然読めなくてね(笑)

○復舞が実現するまで

なぜ採桑者を復活させようと思ったかというところ、二〇〇六年八月頃に国立劇場から「やってみないか」と言われたのがきっかけです。僕自身は、以前から興味はあつた反面、復元してみようとは思っていませんでした。以前、吾越調とらでんに「團乱旋」という大曲があつて、その舞の復元をやろうとしたけれどできなかったことがあります。舞譜に出てくる言葉が『掌中要録』にないような言葉なんです。それで、どういう風にやるのか全然見当がつかなくて…。採桑者は一人舞だからこそ復元できたんじゃないかと思っています。

国立劇場から言われたのが八月頃で、翌四月頃には練習を始めましたから、舞が出来上がるのは八カ月ぐらいかかっていますね。

復舞に際しては、東儀の五代前の秦俊寿としなぐが残した譜面を手がかりに、なるべく譜面に忠実にと心がけました。ところが、昔の譜面というのはものすごく不備なんです。筆筈や笛などもそれほどちゃんとした譜面ではないのですが、舞の譜面というのは実に分からない。たとえば、「ぬきがい」という手がありますが、その中はさらに八種類の手に分かれています。でも、昔の譜面には「ぬきがい」と

だけ書かれていて、第一種とか第二種とかそういうことまでは書いていない。だから、『掌中要録』を見て、今残っている曲の譜面と今やっている手とを比べて、こういうふうに書いてあるときはこういう具合にやるんだなというのを確認しながら手探りでやっていくんですね。

採桑者の譜面に「左足すり開く」と書かれているところがあります。すり開くというのは、普通は左足を上に上げて右足で立つて開くのですが、採桑者は老人の舞だから片足で長く立つようなことはないだろうなど。だから、ただ足を開くだけにして、片足の負担をかけないようにする。そういうような事ではちよつと苦労しましたけれども、手だけを作り上げるのはそんなに大変じゃないんです。むしろ、完成した手を楽がくの長さに割り振って、舞台のどこで何をやるかという、そこに結構長い時間がかかりました。

それから、日光の輪王寺に「舞楽絵図」というのがあつて、採桑者の一場面が描かれているんです。その絵を見たら、意外と考えてなかつたような手杖を担いでという絵がありました。舞譜では「これ、何をやるんだろう」と思っていたところが、絵を見て「ははー、これか」とわかりました。それで「舞楽絵図」の型を入れた部分が、後半に四個所ほどあります。

他には特に、何かを見たり人の意見を聞いたりはしませんでした。文句があるなら俺が責任を取るぐらいの感じでしたかね。そういう意味では、東儀家ではなくて東儀俊美という人間の採桑者になつていてほしいですね、きつと。

国立劇場での初演を終えたときは、やつぱりほつとしましたね。後で録画したテープを観て、ちよつと直したほうがよかつたな、というところを少し



東儀 俊美◎とうぎとしはる

昭和四年生まれ。十一歳で現在の宮内庁式部職楽部に入學し、昭和二十四年同楽部楽師となる。昭和三十一年重要無形文化財保持者、平成六年首席楽長に就任。御大葬、平成の御大札、伊勢の遷宮などの奏楽、大嘗祭の悠紀風俗歌、風俗舞の作曲作舞、皇太子殿下の御歌による催馬楽「大空」の作曲などをおこなう。平成八年退官。専職は筆筈、左舞、箏。現在日本芸術院会員。

変えましたが、ほとんどそのまま二回目以後も舞っています。はじめは多少ジंकクスも気にして、「あと何年生きているかな」と思いましたけど、舞った後は「もういいや」という感じになりました。あれは伝説だったみたいですね、「舞うと死んじゃう」というのは。今のところ生きていますから、どうも大丈夫みたい(笑)。

やっぱり僕は、採桑者には愛着があります。記録した舞譜は宮内庁の僕の教えた生徒に渡して、教えて、この舞を残そうと思っています。それからもう一つは、道友会で左舞をやっている人達にも渡しておこうかなと。二箇所に残したほうが安心です。

○音楽としての舞楽

ずっと舞の話をしてきましたが、舞楽の「楽」についても少しお話ししましょう。採桑者の中で管が笙だけになるところがあり、そこは音が波打つようなものすごくきれいなんですね。僕は盤渉ばんじやうの調子の笙が本当に好きです。あの笙のハーモニーってというのは、実に不思議な音で…。

西洋音楽と雅楽の違いを考えると、西洋音楽では他にはない節を作るのが、必要条件ですね。だから、四小節聴いて他の曲と同じだったら、盗作になっちゃいます。だけど雅楽は違うんです。たとえば、「春が来て、花が咲いた」「春が来て、鳥が鳴いた」。これ、二曲ですが、「春が来て」というところまで聴いたのでは両方同じ節です。次が「花」となるとこういう曲だな、「鳥」となるとこういう曲だなと聞き分ける。これが雅楽という音楽のすぐ方です。

たとえば、「鶉徳」と「長慶子ちやうけいし」は、最初の八小節は全く同じです。九小節目に曲が変わってくる。つまり、譜面の一行目だけだとどちらの曲なのか分からない。だけど、同じ節でも「鶉徳」を吹いているときと「長慶子」を吹いているときでは、出てくる音は違っているはず。昔、源博雅が「長慶子」を作った時に、それを聴いたお公家さんたちが「何だい、これ、『鶉徳』と同じじゃないか」とは言わなかったと思うんです。それだけ聴くほうが耳を持っていたわけね。今はそこまで聴き分けることができるだろうかと思わずにはいられません。

吹くほうも「長慶子」には「長慶子」、「鶉徳」には「鶉徳」の吹き方があって、音程は一緒でもリズム的には同じじゃない気がします。なんというか、音

頭からして違わなきゃいけないだと思えますよ。これが雅楽という音楽の特性みたいなものかもしれませんね。

○雅楽の将来

いま、雅楽の演奏会というのが少なくて、「音色は知っているけれど結婚式以外に雅楽を聞いたことがない」という人がたくさんいますよね。一人でも多くの人に正式な雅楽の演奏会に行つて欲しいと、僕は思います。そして、昔のお公家さんみたいに「長慶子」と「鶉徳」との聴き分けができたり、「陵王」だったらあそこの雅楽会が上手い、「納曾利なまぞり」だったらこっちのほうがいいとか。そういう耳をもつたお客さんが増えてくれれば、雅楽界のレベルはもつと上がると思います。

これから雅楽を志す新しい世代に望むのは、まず、安易にビデオやDVDなど映像に頼るなという事です。映像を見て学ぶのではなく、自分の足で歩いて、いい先生を見つけて習つて、稽古に励む。先生を道案内にして自分で上手くなる。それが基本です。あとは、焦らないほうがいいということですね。雅楽というのは練習曲がありません。僕は以前、生徒に「毎年自分の誕生日に『越天楽』を演奏して録音してみるように」と教えていました。それを五年ぐらいやって最初に入れた「越天楽」を聴いてみると、自分がどの程度うまくなったか分かるよと。いろんな曲をやつても駄目で、同じ曲でやつていくと違いが出てくるはずなんですよね。

もう一つは、あまり音程とか拍子とかにこだわることです。昔の名人物語などを読むと、拍子が正しいとか音程が正しいという名人は一人もいないんです。たとえば、羅生門の鬼が感激して出てこなくなった話とか、泥棒が入つて何もなくなつちやつた家の真ん中で源博雅が筆箆を吹いたら、それを聴いて感激した泥棒がモノを返しに来たとか。そういうのが雅楽の名人らしいですね。ただ僕に言わせると、吹いたほうも名人かもしれないけど、聴いて感じた泥棒も相当な泥棒です。今の泥棒だったら全然感じないでしょう(笑)。

雅楽の演奏会がたびたび開かれて、たくさんのお客さんが聴いてくれて、曲によつて演奏団体を選ぶような耳を持つたお客さんが増えれば、雅楽はもつと発展すると思います。